2009年度 修了

ピアグループの遷延化による友人・仲間関係の変容
－ サリヴァンの理論からその変容をひもとく －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
坂口　泰章

青年の人格に多大な影響を与える集団としてクーリー（1929）の述べる第一次集団である仲間集団が上げられる。精神医学者であり、米国対人関係学派でもあったサリヴァン（1953）は、この仲間集団に注目し、このような関係を親友（chum）と表しその重要性について指摘している。サリヴァン（1953）はこの関係における「もたらされる安全保障感」や「自分は誰かに似ている」という感覚の発達促進的意義を説き、親友関係（chumship）を、形成するとそれまでの人格の歪みが修正され、また後の友人・仲間関係を築く際の礎になると述べている。

しかし、現代の仲間・友人関係においては、しばしば「表面的」という指摘があり、自分自身への関心が浅く内省が困難な青年の報告がなされており、このような青年はサリヴァン（1953）が述べるような親友関係（chumship）が形成されていない可能性が危惧される。

そこで本研究では、このような「表面的」と指摘されている現代、青年はどのような友人・仲間関係を築いているのかを明らかにするためにサリヴァン（1953）の理論をひもとき、さらに先行研究を読み解くことにより、サリヴァン（1953）の述べる親友関係はどのような展開と変容遂げているのかを明らかにするものである。

そして先行研究を読み取った結果、サリヴァン（1953）の述べる友人・仲間関係は展開とげ、同性同年輩であり同一行動特徴とする「ギャンググループ」そして、同一言語を特徴とする「チャムグループ」最後に、互いの異質性を認め合い仲間としてグループを形成する「ピアグループ」に臨床発達的な視点からさらに細分化されており、ギャング・チャム・ピアの順で発達していくことが明らかになった。

しかし、サリヴァン（1953）は人間の人格発達は社会の構造と密接に関わっていると述べており、一方では前述したような友人・仲間関係を形成されていないことが窺われ、受験戦争の低年齢化や携帯電話の一般化など、さまざまな我が国の現象によりギャンググループの消失が示唆され、またその消失を埋める形でチャムグループが肥大化し、それによりピアグループが遷延していることが考えられた。

そして、このようなピアグループの遷延により我が国においては、青年のアパシー化やモラトリアムの延長そして、脱青年期と言われるような従来の青年理解では捉えられないような問題が現象として起こっていることが示唆された。

このようなことからも青年の人格発達は、間接的なコミュニケーションよりも集団の内部で行われる直接的なコミュニケーションの方がインパクトが強く比重が大きいことが言え、青年の人格発達はこのような集団の発達過程に大きく寄与していることが窺われた。